

少量土壌培地耕におけるアールスメロンのえそ斑点病抵抗性有望品種の選定			
<p>【要約】アールスメロンのえそ斑点病抵抗性品種である ミラノ の少量土壌培地耕における生産性は、県内で広く栽培される 雅春秋系 に比べて、収量、品質が同等である。県内で問題となっている 雅春秋系 のえそ斑点病による収量低下は ミラノ への品種転換を図ることで防止できる。</p>			
農業技術振興センター・栽培研究部・野菜担当		【実施期間】 平成20年度～平成21年度	
【部会】 農産	【分野】 高品質化技術	【予算区分】 県単	【成果分類】 指導

【背景・ねらい】

近年、県下の少量土壌培地耕のアールスメロン栽培において、えそ斑点病の発生による収量低下が問題となっている。その対策として土壌消毒や接ぎ木栽培が考えられるが、労力や経費がかかる。そこで、えそ斑点病抵抗性品種の中から少量土壌培地耕に適した品種を選定する。

【成果の内容・特徴】

抑制作型の少量土壌培地耕における **ミラノ** の果実は、特大サイズ以上の果重で、糖度は特秀の規格である。また、外観品質は **雅春秋系** と同等で、うるみ果の発生はない（表1、図1～2）。収穫期は **雅春秋系** より2～3日遅い。

半促成作型の少量土壌培地耕における **ミラノ** の果実は、**雅春秋系** よりやや小振りとなり、糖度はすべて特秀の規格である。また、外観品質は **雅春秋系** より優れ、ネットの発生程度は4.1でほぼ適密度である（表1、図3～4）。生育および収穫期は **雅春秋系** と同程度である。

ソナタ春秋系 は、抑制作型でうるみ果が発生し、半促成作型では糖度が低い。

また、**K4-005** は着果が不安定である（表1、図1～4）。

以上の結果より、えそ斑点病抵抗性品種のアールスメロン **ミラノ** は、少量土壌培地耕において、抑制作型、半促成作型ともに県内で広く栽培される **雅春秋系** と同等の生産性（収量、品質）が得られる。

【成果の活用面・留意点】

抑制作型は8月上旬定植、10月下旬収穫であり、半促成作型は4月上旬定植、7月上旬収穫とする。

果重及び糖度は県内のメロン産地の規格を参考に、果重は2.0kg以上（超特大）、1.7～2.0kg（特大）、1.5～1.7kg（大）、1.3～1.5（中）、1.1～1.3kg（小）、規格外とし、糖度は、13.6(Brix)以上（特秀）12.0～13.6(Brix)（秀）と評価した。

[具体的データ]

表1 収量、品質

試験年度	試験区	品種名	収穫日	着果日	着果節位	果重 (g)	果高 (cm)	果径 (cm)	果型 (果高/果径)	糖度 (Brix)		外観 ^Y	うるみ果の発生程度
										内果肉	中果肉		
2008年 抑制	対照	雅春秋系	10月23日	8月26日	15.3	2,296	16.4	15.7	1.04	16.2	15.3	4.6	1.2 ^Z
		ソナタ春秋系	10月23日	8月24日	14.2	2,250	15.8	15.7	1.01	15.4	14.5	4.5	1.1
		ミラノ	10月25日	8月27日	16.7	2,121	16.0	15.5	1.03	15.1	14.3	4.5	0.0
		K4-005 ^Z	10月24日	8月26日	16.2	2,154	16.3	15.4	1.06	15.1	14.4	3.5	0.7
2009年 半促成	対照	雅春秋系	7月8日	5月12日	14.2	1,458	14.6	14.0	1.04	14.9	13.6	3.5	0.0
		ソナタ春秋系	7月8日	5月12日	14.4	1,688	14.8	14.8	1.00	14.1	12.6	3.8	0.0
		ミラノ	7月8日	5月11日	14.6	1,403	14.9	13.9	1.07	15.3	13.8	4.1	0.0
		ミラノ	7月8日	5月11日	14.6	1,403	14.9	13.9	1.07	15.3	13.8	4.1	0.0

^ZK4-005は雌花の着生が悪く、着果した6株のみ調査し、その他の品種は14株調査した。

^Yネット発生密度を0(粗)～5(密)の6段階で評価し、適密度を4とした。

^Zうるみ果の発生程度は、発生無し：0 発生微：1 発生少：2 発生多：3とした。

< 耕種概要 >

播種および定植日：2008年の抑制栽培は7月19日に播種(セル育苗)し、8月1日に定植した。2009年の半促成栽培は3月4日に播種(ポット育苗)し、4月6日に定植した。

栽植本数：少量土壌培地耕ベンチ(畦巾2m)に株間50cmの2条植え(200株/10a)とした。

給液管理：培養液はタンクミックスA & Bを生育ステージに合わせてEC1.0～2.0dS/mに調整し、1回の給液量を350mlとし、1日の排水率が30～40%になるよう、天候および生育に合わせて給液(1～8回/日)した。排水は養液タンクに回収し再利用した。

整枝：主枝1本仕立てとし、26節で摘心を行い、13～16節の側枝に1果着果させた。

遮光および保温対策：2008年の抑制栽培は定植後1週間寒冷紗(シルバー)をハウス内で被覆し、2009年の半促成栽培はカーテン・トンネル等の保温を行わなかった。

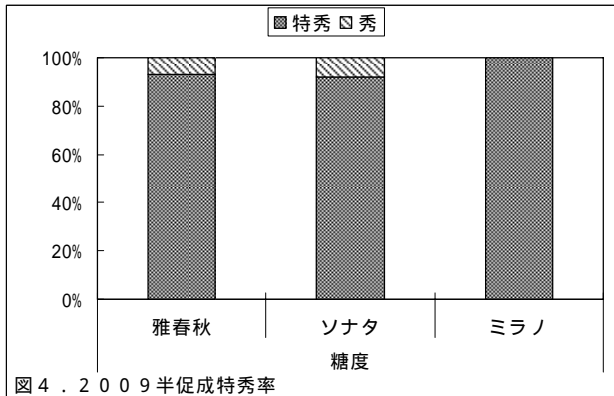
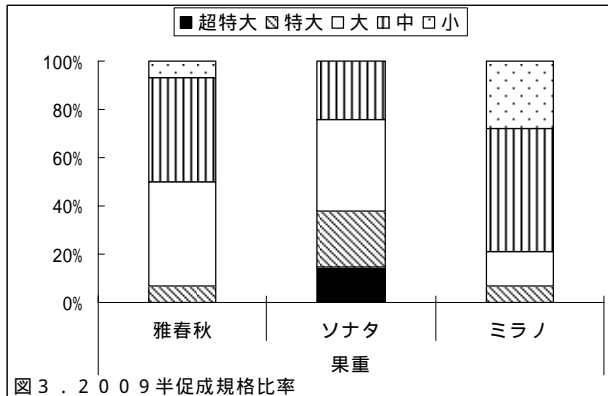
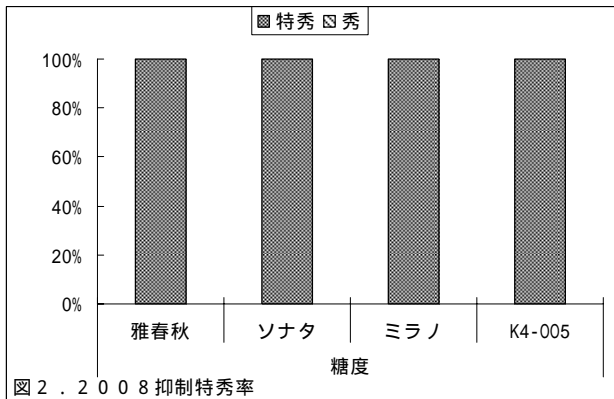
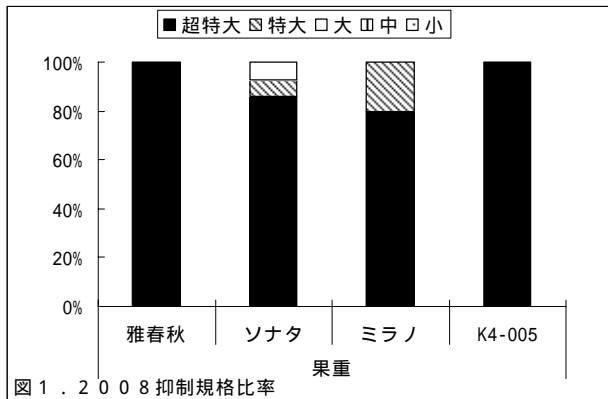


図1. うるみ果の発生程度(2008年抑制栽培)

[その他]

・ 研究課題名

大課題名：消費者の多様なニーズに応える高品質・高付加価値化技術の開発

中課題名：安全・安心・高品質な農畜産物の生産技術の開発

・ 究担当者名：伊吹久美 (H20～21)

・ その他特記事項：平成20年度技術的要請課題(甲賀)

